



Data

監督・脚本: エメラルド・フェネル
 出演: キャリー・マリガン/ポー・バーナム/アリソン・ブリー/クランシー・ブラウン/ジェニファー・クーリッジ/コニー・ブリットン/ラヴァーン・コックス/アダム・プロディ/マックス・グリーンフィールド/クリストファー・ミンツ=プラッセ/サム・リチャードソン/モリー・シャノン

👁️👁️ みどころ

「復讐モノ」はリアルなほど、そして残忍なほど面白い。クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル Vol. 1』(03年)、『キル・ビル Vol. 2』(04年)や日本の『必殺』シリーズを観ればそうかもしれないが、「復讐モノ」と「ロマンティック・コメディもの」を融合させればどうなるの？

ジョディ・フォスターが熟演した『告発の行方』(88年)を観れば、レイプ事件の被害の立証の難しさがよくわかるが、「プロミシング・ヤング・ウーマン」だったはずのヒロインが、“復讐の天使”として夜な夜なクラブに繰り出しているのは何のため？「酔った女には何をしても許される」と考える男たちは、すべてそのターゲットに？

第93回アカデミー賞で脚本賞を受賞したエメラルド・フェネル監督の脚本に注目！とりわけ、ラストのどんでん返しに注目！もちろん、それはネタバレ厳禁だが・・・。

■□■タイトルの意味は？5部門で候補！脚本賞を受賞！■□■

2021年の第93回アカデミー賞は女性監督の進出が目立ったが、激戦の末、中国出身のクロエ・ジャオ監督の『ノマドランド』(20年)、『シネマ48』24頁)が作品賞、監督賞、主演女優賞の3冠をゲット。“中韓の頂上決戦”と目されたリー・アイザック・チョン監督の『ミナリ』(20年)、『シネマ48』30頁)は、助演女優賞を受賞した。しかし、如何にアジア勢が進出しようとも、アカデミー賞の本場はやはり米英のもの？そんな立場を死守したのが、女優、脚本家、クリエイター、映画製作者等、多様な顔を持つ、1985年生まれのエメラルド・フェネルだ。エメラルド・フェネルは、監督としても短編を発表していたが、長編監督デビュー作となったのが本作。そんな本作でエメラルド・フ

エネルは脚本と製作を兼ねていたが、本作は、第93回アカデミー賞で作品賞、監督賞、脚本賞、編集賞、主演女優賞の5部門にノミネートされたうえ、脚本賞を受賞したから、お見事！若い才能は次々と生まれてくるものだ。

最近の邦画には、『きまじめ楽隊のぼんやり戦争』（20年）（『シネマ48』270頁）や『なんのちゃんの第二次世界大戦』（20年）等、奇妙なタイトルが目立つが、本作は原題の『Promising Young Woman』をそのままカタカナで邦題にしている。3つの単語そのものは易しいものだが、『プロミシング・ヤング・ウーマン』って一体何？それは、日本でもよく口にされる、「将来を約束された前途有望な若い女性」という意味だ。なるほど、なるほど。しかして、タイトル通りの若手女性監督エメラルド・フェネルが、自ら脚本を書き製作もした長編初監督作品のテーマは？

■□■テーマは女の復讐！なのにロマンティック・コメディ？■□■

強姦罪は殺人罪と共に原始的な犯罪で重罪だが、強姦罪の捜査は殺人罪の捜査に比べると、格段に難しい。殺人罪でも被害者は何も語ってくれないからその捜査は難しいが、強姦罪では、第1に被害者が世間体を気にして容易に真実を語りたがらないから立証が難しい。第2に、合意があったという加害者の主張を如何に突破するかという問題点がある。そんな“論点”を赤裸々に描いた名作が、ジョディ・フォスターの代表作『告発の行方』（88年）だった。若き日の彼女は、スクリーン上でそのレイプシーンを文字どおりの“体当たり”で熱演していた。すると、本作では、『プライドと偏見』（05年）（『シネマ10』198頁）、『17歳の肖像』（09年）（『シネマ24』20頁）、『わたしを離さないで』（10年）（『シネマ26』98頁）等で世界的に有名な、英国の美人女優キャリア・マリガンが、そんな大胆なレイプシーンに挑戦するの？

本作冒頭、真夜中のクラブで酔っ払った男たちの視線を集めるのは、ソファにだらしなく沈み込む泥酔した若い女性だが、これがキャリア・マリガン演じる女性キャシーことカサンドラ・トマス。「よし、俺が行く」と、3人組の男たちの中の1人がいかにも紳士的にキャシーの介抱に乗り出し、タクシーでキャシーの家まで送り届けようとしたが、その狙いは明白だ。言葉巧みに目的地を変更し、自宅に連れ込めば、後はしめたもの。思い通りに……。いざことに及ぼうとしたが、その瞬間に、事態は急転直下……。アレレ、なぜ本作はそんなストーリーに？

エメラルド・フェネル監督の脚本は一体何を狙っているの？第93回アカデミー賞の作品賞、監督賞、主演女優賞の3冠をゲットした『ノマドランド』は“現代のノマド（遊牧民）”がなぜ生まれたのか、を根源的に問いかける奥深いテーマの名作だったが、“女の復讐モノ”たる本作は、シリアス一色ではなく、ロマンティック・コメディ色も！

■□■復讐のターゲットは？“黒革の手帖”は？本命は？■□■

“女の復讐モノ”の代表は、クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル Vol.1』（03年）（『シネマ3』131頁）、『キル・ビル Vol.2』（04年）（『シネマ4』164頁）

や、松本清張の原作を映画化した『霧の旗』（65年）。そこでは、当初から復讐のターゲットも、その動機も明示されていた。ところが、同じ“女の復讐モノ”である本作では、冒頭、キャシーのターゲットとされた男を含め、キャシーの復讐の相手となる男はキャシーの“黒革の手帖”に書かれているだけで、不特定多数のようだ。そのうえ、もともと前途有望な医大生だったのに、医大を中退し、今は30歳にもなって嫁にも行かず、両親と共に暮らしているキャシーは、親友のゲイル（ラバーン・コックス）が経営するコーヒーショップで安月給のバイトをしつつ、夜な夜なクラブに繰り出して冒頭のような“お仕置き（鉄槌）”を男たちに下しているらしい。しかして、松本清張の“黒革の手帖”は重要な意味を持っていたが、本作でキャシーが名前を書いたり抹消したりしている“黒革の手帖”に何の意味があるの？

かつて、「ロマンティック・コメディの女王」といえばメグ・ライアンだったが、本作でも、冒頭で“女の復讐モノ”であるというテーマが示された後、医学部の同級生で今は小児科の医師になっている男ライアン（ポー・パーナム）が登場し、キャシーがライアンとロマンティック・コメディ風の楽しいストーリーを展開していくので、それに注目！医学部は法学部と違って、勉強する期間が長いから、“優秀な医学生”ほど、女には疎くなるもの？かどうかは知らないが、ライアンを見ていると、そう思えてくる。ライアンが医学部の時に若く聡明なキャシーに好意を抱いていたとしても、それから数年経てばライアンを取り巻く女事情にも変化があったはず。しかし、エメラルド・フェネル監督の脚本はあえてそれに触れず、うぶなままのライアンがとことん一方的にキャシーに対する恋心を見せてくるので、そのロマンティック・コメディぶりに注目！もつとも、それは本筋ではなく、そこでのポイントはライアンからもたらされた同級生たちの現況らしい。あの忌まわしい「ニーナ事件」の後、医大を中退したキャシーは、一切同級生との連絡を絶っていたが、卒業後、小児科医をしているライアンが同級生たちの現況を把握しているのは当然。ライアンとのデートの中でそれらの情報が入ってくる中、キャシーの“女の復讐”の本命は誰に向かっていくの？

■□■傍観者も同罪？標的は、まず2人の女性に！■□■

キャシーが医大を中退した後、夜な夜なクラブに通い、男たちに鉄槌を下し続けているのは、キャシーの幼なじみで大親友、そして、間違いなく「プロミシング・ヤング・ウーマン」だったニーナが、パーティーで酔いしれた後、同級生の男たちにレイプされたという事件のため。「ニーナ事件」の処理は如何に？その結末を見たことによって、キャシーは「酔った女には何をしても許される」と考える男たちへの復讐が自分の使命だと確信するに至ったわけだ。そんな考えが正しいか否かの判断は難しいが、エメラルド・フェネル監督の脚本はそれを根本に据えて、本作を“女の復讐劇”と規定した上、ロマンティック・コメディも付加した面白い映画にしている。

しかし、レイプ事件の実行犯はあくまで男で、女は実行犯になり得ない。ところが、キ

キャシーがまず復讐の標的にしたのは、医大の同級生で、今はリッチな男性と結婚し、双子のママとなっているマディソン（アリソン・ブリー）だったからビックリ！キャシーからの久々の電話によって実現した2人の女性の食事は、マディソンの近況報告から始まったが、キャシーが仕組んだ“泥酔作戦”と冷酷な啖呵のきり方に注目！ほとんど眠ってしまったマディソンを尻目に、キャシーは見知らぬ男に部屋のキーを渡して「連れ込みオーケー」と宣言したから、さあ、マディソンの貞操の危機は？

続いて、キャシーのターゲットはフォレスト大学の医学部部長の女性ウォーカー（コニー・ブリットン）に向かったが、それはウォーカーが「証拠が足りない」という理由でキャシーの告発を取り合ってくれなかったためだ。弁護士の私に言わせれば、そんなキャシーの復讐の理由の正当性には疑問があるが、ウォーカーへの復讐に見るキャシーの手口はかなり悪辣だ。もともと、それをトコトン見せず、ロマンティック・コメディ色を維持していくのが本作の特徴だから、キャシーの鮮やかな手口をじっくりと！

■□■ 弁護士も復讐の標的に？そりゃナンセンス！ ■□■

本作の肝は、何と言っても、第93回アカデミー賞で脚本賞を受賞したエメラルド・フェネル監督の脚本の面白さ。そして、その脚本にぴったりハマった、美人女優キャリー・マリガンの起用だ。クエンティン・タランティーノ監督は日本が大好きだから『キル・ビル』のヒロインは忍者の格好で日本刀を振り回しながら血なまぐさい復讐劇を展開していたが、亡きニーナに代わって男たちへの復讐に執念を燃やす本作のヒロイン、キャシーには、一方では倦怠感も顕著だが、一貫してチャーミングさが目立っている。しかも、エメラルド・フェネル監督の脚本は「映画は何でも見せればいいものではない」ことを、うまくツボを押さえながら教えてくれるから、その点で“ホラーもの”とは全く異質の、ロマンティック・コメディ作に仕上がっている。

しかし、私が納得できないのは、マディソンとウォーカー学部長に続く復讐のターゲットが、弁護士のジョーダン・グリーン（アルフレッド・モリーナ）に向かうこと。彼がターゲットにされた理由は、彼が集団レイプ犯の主犯であるアル（クリス・ローウェル）の弁護人として活動し、アルには何のお咎めもないという結果に導いたためだ。私は松本清張の『霧の旗』が大好きだが、そこでも大塚弁護士が復讐のターゲットにされたことには納得できなかった。しかし、同作では、兄が無実の罪で有罪とされ死んでしまったのは、大塚弁護士が弁護してくれなかったためだ、と逆恨みしたヒロインが浅はかな若い女だったため、と納得することができた。しかし、第93回アカデミー賞脚本賞を受賞した脚本の中で、レイプ犯の弁護士が依頼案件を成功に導いたことが、被害者の親友だったキャシーから復讐される根拠になるという物語が描かれるのは意外だ。グリーン弁護士自身も、アルの事件を担当し、成功させたことを反省し、弁護士業を今は引退しているそうだが、それっておかしいのでは・・・？

■□■女の幸せはやっぱり・・・？ヒロインの心は如何に？■□■

医大の同級生の男たちによる親友ニーナへの集団レイプと、それによるニーナの死亡は明白。それなのに、主犯のアルをはじめとする、男たちへの刑事処分はなかったうえ、学内での処分も全くなし。それは、ウォーカー学部長によると、キャシーの告発には証拠が足りないため、だそうだ。そんな「ニーナ事件」を契機として医大を中退したキャシーは、「酔った女には何をしても許される」と考えている男たちに“鉄槌”を下すため、夜な夜なクラブに出かけていた。しかし、偶然ライアンと再会し、彼の口から「ニーナ事件」の関与者たちの現況を聞き及ぶと、彼女のターゲットは“一般的な男たち”から“特定の人物”に設定されていくことに。その第1がマディソン、第2がウォーカー学部長、第3がグリーン弁護士だった。

他方、その間、ライアンからの一本調子ながらも真心のこもった求愛活動が続けられると、さすがにキャシーの女ゴコロにも影響が出たらしい。それは、「やっぱり、女の幸せは平凡な結婚」というものだが、まさか「プロミシング・ヤング・ウーマン」であるキャシーが、今さらそんな方向に進むことはないはずだ。そう思っていたが、エメラルド・フェネル監督の脚本は、キャシーからライアンに愛を告白したり、ライアンを自宅に招待し、両親に紹介するストーリーになっていくから、アレレ。これにはライアンも有頂天になり、このまま進めば、キャシーは男たちへの復讐も、「ニーナ事件」の関与者たちへの復讐も諦めて、ライアンの良妻賢母に？

■□■事態は急転換！そのきっかけは？動画には何が？■□■

そんな展開（心配？）が急転換したのは、まんまとキャシーから“鉄槌”を下され、キャシーの仕掛けた罠にはまってしまったマディソンが、「何とんでも、あの夜の顛末を教えてください」と懇願してきたため。それに対するキャシーの答えはここではネタバレできないが、重要なのは、そこでマディソンから、ある動画を受け取ったことだ。マディソンから「もう二度と連絡してこないでくれ」との言葉と引き換えに受け取ったその動画を再生してみると・・・。

強姦事件は重罪。それが集団レイプ事件になるとさらに重罪だから、警察がまともに捜査していればこんな動画は証拠として発見され、押収されていたはず。そうであれば、アルたちの有罪は立証され、処罰されていたはずだ。しかるになぜ？しかも、その動画の中にはライアンは実行犯ではないものの、明らかに共犯者！さあ、映画はここから怒涛のクライマックスに向かっていくことに！

■□■本命への鉄槌は？その舞台は？元医大生が握るメスは？■□■

美人女優は何を着ても似合うのは当然だが、『プライドと偏見』で中世の美しいドレス姿を披露していたキャリー・マリガンが、本作のクライマックスとなる、復讐の本命・アルへの“鉄槌”を下すときのコスチュームは、何と色気タップリのナース姿になるので、それに注目！キャシーがそんな姿で乗り込んでいったのは、アルが独身最後の夜を医大の仲

間たちと共にバカ騒ぎして過ごす別荘だ。

ライオンを散々脅しつけてその場所を確認したキャシーの登場に、アルたちパーティー参加者はビックリだが、売春婦代わりの特別ゲストなら、飛び入り参加もオーケー。酔っ払ったバカな男たちの判断はその程度のものだ。しかも、医大生は美人看護士に弱いから、キャシーがちょっとした色気を見せれば、男たちはいちころ。一列に並べた男たちの口に次々とウィスキーを流し込んだうえ、アルと2人で2階の部屋へしげこむという演出に、仲間たちもアルも納得だ。しかも、2階で2人きりになったところで、ベッドと手錠があれば、サド・マゾ風の演出も最高。「軽くだよ」と言いながらまんまと両手をベッドに括り付けられる中で、アルがキャシーから聞かされた言葉とは？なるほど、なるほど。さあ、ここから下されるキャシーの本命への“鉄槌”は如何に？

クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル』に見る復讐劇は、日本刀を使ったリアルな斬り合いや、血しぶきが舞い散るド派手な演出が持ち味だったが、元医学生のカシシーなら、手術用のメスを扱うのはお手のもの。さあ、そこから始まる「阿部定事件」まがい(?)のアルへの“鉄槌”とは？

■□■ヒロインが死亡！？これ本当？ネタバレ厳禁の結末は？■□■

『てなもんや三度笠』は1960年代のテレビの超人気番組だったが、そこでコメディアンとして大活躍した藤田まことは、その後『必殺仕置人』等の『必殺シリーズ』で本格的な演技派に成長した。そこで藤田まことが演じた中村主水は、本作のカシシーと同じように、「表の顔」と「裏の顔」を使い分けながら悪への鉄槌を下していたが、ここでは、“正義のため”の他、“お金のため”というビジネスライクな面も強かった。また、中村主水率いる「仕置人」たちは殺しのプロ集団だったから、殺しのテクニックは鮮やかだが、残忍と言えれば残忍だった。

それに対して、ロマンティック・コメディ色満載の本作は、“お仕置き”の結末を見せないのがポイント。それは、下手するとリアリティがない！と批判される恐れもあるが、本作は全然そうならないところがミソだ。しかし、本作のクライマックスで“本命”に対して下される“鉄槌”はかなり残忍そう。だって、今にもアルはキャシーが持つメスによって男の大切なところを切り取られそうになるのだから。もしそんなことになれば、命は助かっても、新婚生活は真っ暗闇に・・・？

パンフレットの最初のページには「復讐は甘いもの。でも、鮮度が命。」と書かれている。しかし、本当に復讐は甘いものなの？そんな疑問も含め、ネタバレを避けるため、本作についての私の評論はこれで終わりとしたい。エメラルド・フェネルが書いた脚本が、第93回アカデミー賞で脚本賞を受賞したこの意味は、キャシーがメスを握った後の、更にあつと驚く展開をあなた自身の目でしっかり見ることによって、しっかり確認してもらいたいものだ。

2021（令和3）年8月11日記